

乳牛の子宮捻転用手整復における押し込み保持法の検討

向井周平^{1)†} 河崎 公¹⁾ 佐藤あかね¹⁾ 佐藤洋平²⁾
加藤 肇¹⁾ 村上高志³⁾



- 1) 北海道農業共済組合ひがし統括センター根室西部支所 (〒 088-2576 野付郡別海町西春別 109-28)
- 2) 北海道農業共済組合ひがし統括センター根室南部支所 (〒 087-0025 根室市西浜町 3-87-1)
- 3) 酪農学園大学生産動物外科学ユニット (〒 069-8501 江別市文京台緑町 582)

本文はこちら
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jvma/76/1/76_e5/_article/-char/ja

(2021年9月10日受付・2022年8月31日受理・2023年1月31日公開)

要 約

子宮広間膜により腹壁背部から吊り下げられている牛の子宮には、捻転が生じても正常な位置へ戻る力が働いている。押し込み保持法は、その元に戻る力を引き出すように、子宮を押し込み続けて子宮捻転を整復するという新しい概念に基づく用手整復方法である。本法では、① 回転ではなく押し込む力を加えること ② 押し込み続けること ③ 胎子ではなく子宮に力を加えることの3点が重要となる。本法の適応は、分娩時に発症し産道に手を挿入可能な症例であり、整復開始時に胎子を産道から触知できない症例も含まれた。未破水の症例では人工破水を行う必要はなかった。6年間で子宮捻転の35例に本法を適応し、27例の整復に成功し胎子生存率は70%であった。本法は、従来法と比べ、短時間で省力的に整復でき、適応症例の範囲も広く、子宮捻転の用手整復率向上に寄与すると考えられる。

——キーワード：乳牛，用手整復，押し込み保持，立位，子宮捻転。

-----日獣会誌 76, e5～e10 (2023)